

令和6年度病害虫発生予報第1号

令和6年4月1日
山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

3月28日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1か月（予報期間3月30日～4月29日）の天気は次のとおりです。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。向こう1か月の降水量及び日照時間はほぼ平年並の見込みです。

I 各作物の病害虫発生予報

【果樹】

| 作物 | 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | 予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□） |
|-----|------------------------|------|-------------------|---|
| ブドウ | 黒とう病 | 平年並 | やや多い | <ul style="list-style-type: none"> ○昨年の収穫期の調査（シャインマスカットほ場）では、新梢（副梢を含む）の発病ほ場率は平年よりやや多い。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □本病は展葉着後から感染するため、展葉初期に防除暦に従って薬剤を散布する。 □特にシャインマスカットなど欧州系品種は本病に弱いので耕種的防除（病斑がみられる枝やまきひげの除去）を徹底する。 |
| モモ | せん孔細菌病 | 平年並 | 平年並 | <ul style="list-style-type: none"> ○昨秋の調査ほ場における発病葉率は、平年並であった。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □芽枯れや枝枯れ、春型枝病斑のある枝は、見つけ次第除去する。 □防除暦に従って満開直後から定期的に薬剤を散布する。なお、雨で伝染するため、散布は降雨前に行う。 □モモせん孔細菌病防除マニュアル（令和6年3月発行）を参考に防除を徹底する。 |
| | うどんこ病 | 平年並 | 平年並 | <ul style="list-style-type: none"> ○昨年の発生量は概ね平年並であった。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □感染期に当たる落花期（花卉が散り始める頃）から、本病に適用がある薬剤を選択して、遅れないように防除を行う □発病果は優先して摘果する。 |
| | モモモグリガ | 平年並 | 平年並 ～ やや少ない | <ul style="list-style-type: none"> ○越冬量は、平年よりやや少ない。 ○3月下旬現在、フェロモントラップ設置ほ場における誘殺数は平年並～やや少ない。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □この時期、気温が高いと産卵の機会が増え多発する恐れがあるため、食入初期（落花期）の防除を徹底する。 |

【果樹】

| 作物 | 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | 予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□） |
|-----------|---------------------|------|-----|--|
| スモモ | <u>スモヒメシクイ</u> | 平年並 | 平年並 | ○昨年の発生量は平年並である。 ○3月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市）への越冬成虫の誘殺数は0である。 □被害の多い園では交信かく乱剤(ナシヒメコン)を利用する。 |
| | <u>アブラムシ類</u> | 平年並 | 平年並 | ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □生育進度に応じ、開花直前（発生初期）～落花期の防除を実施する。また、発生が続く場合は防除暦に従って、追加防除を行う。 |
| 立木類 | <u>灰星病</u> | 平年並 | 平年並 | ○近年、防除が徹底されており、発生量は平年並で推移している。 ○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。 □前年被害が見られた園では、花腐れ症状の発生が見られな いかよく観察し、薬剤の予防散布を徹底する。 □被害部は見つけ次第除去し、園外に持ち出すなど適切に処 分する。 |
| | ウメシロ カイガラムシ | 平年並 | 平年並 | ○園地による差はあるが、一部越冬成虫の寄生がみられる。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込み である。 □例年4月下旬～5月上旬が、1回目の幼虫発生ピークとな る。この時期、幼虫の発生が揃い、防除効果が高いため防 除を徹底する。 |
| | <u>果樹 カメムシ類</u> | 平年並 | 平年並 | ○昨年10月以降の誘殺数は、山沿い地域で平年より多かつ た。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込み である。 □果樹園への飛来状況は、山林の状況によって年次変動があ る。夕方～夜間（寒い内は昼間）に園を見回り、飛来状況 に応じ地域ごとに一斉防除を行う。 |
| 施設 ブドウ | ハダニ類 | 平年並 | 平年並 | ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込み である。 □例年、この時期以降から発生がみられる。発生が多くな ると防除が困難になるため早期発見に努め、防除暦を参考に 発生初期の防除を徹底する |
| | <u>灰色かび病</u> | — | 平年並 | ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込み である。 □開花期が天候不順にあたると、ハウス内での発生が多くな るため、湿気がこもりやすい施設では花をよく観察する。 □ビニールマルチの敷設と換気に努める。特に、開花期を迎 える作型では徹底する。また、多湿時は暖房機および循環 扇を稼働させ、湿度の低下を図る。 □落花後の花かすを取り除くとともに、発病花穂・果房は取 り除き、薬剤防除を実施する。 |

※ミツバチ等の訪花昆虫を導入する地域もあるので、防除(主に殺虫剤)に当たってはミツバチ等への影響も考慮し、指導機関の防除指導(防除時期、使用薬剤など)に従う。

【野菜】

| 作物 | 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | 予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□） |
|--------|-------|------|------------|---|
| 半促成トマト | 葉かび病 | — | 平年並 | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□抵抗性品種でも発病する菌が存在するため、注意して発病の有無を確認する</p> <p>□すすかび病と判別しにくいいため、防除には両方に登録のある薬剤を使用する。</p> <p>□県内で効果の低下がみられる薬剤もあるため、防除薬剤は総合農業技術センター令和4年度成果情報「トマト葉かび病の抵抗性品種に感染する系統の発生および有効薬剤」 https://www.pref.yamanashi.jp/sounou-gjt/documents/r4_10_hakabi.pdfを参考に防除する。</p> |
| | すすかび病 | — | 並 (例年比) | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気を行い、施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□葉かび病と判別しにくいいため、防除には両方に登録のある薬剤を使用する。</p> |
| | 灰色かび病 | — | 平年並 | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように、過度な灌水は控え、低温に注意しながら換気を行い、施設内を適度な湿度に保つ。また、多湿時は暖房機および循環扇を稼働させ、湿度の低下を図る。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□前年多発した施設では予防散布に努める。</p> |

【野菜】

| 作物 | 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | 予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□） |
|---------|------------------------|------|------------|---|
| 半促成トマト | コナジラミ類 | — | 平年並 | <p>○3月下旬現在、黄色粘着トラップほ場（中央市）における誘殺量はハウス内、ハウス外ともに平年並である。</p> <p>○3月下旬現在、巡回ほ場では発生が見られていない。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みであり、春先の気温上昇とともに増加する恐れがあるため、注意する。</p> <p>□ウイルス病を媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、施設開口部（天窓、側窓、換気扇口等）はすべて0.4mm目以下の防虫ネットで被覆する。出入り口は二重カーテンにするなどして、侵入を防止するとともに、ネットの隙間や破れ等がないか注意して確認し、不備があった場合は直ちに補修する。</p> <p>□黄色粘着板が苗の生長点付近にくるように設置し、定期的に誘殺状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□薬剤によってはマルハナバチへの影響があるので、薬剤の選択には注意する。</p> <p>□施設内外の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。また、芽かきした茎葉は適切に処理する。</p> <p>□ウイルス病の発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて虫を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、適切に処分する。</p> |
| | アザミヤカ類 | — | 平年並 | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□侵入防止のため施設開口部に防虫ネットを設置する。</p> <p>□施設周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。</p> <p>□薬剤によってはマルハナバチへの影響があるので、薬剤の選択には注意する。</p> |
| 半促成キュウリ | うどんこ病 | — | 平年並 | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に出し、処分する。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> |
| | アブラムシ類 | — | 平年並 | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。</p> |
| | ハダニ類 | — | 並 (例年比) | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。</p> |

【野菜】

| 作物 | 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | 予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□） |
|-----|-----------------------|------|-----|--|
| イチゴ | うどんこ病 | — | 平年並 | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並からやや少ない。</p> <p>○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> |
| | ハダニ類 | — | 平年並 | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は、高い見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p> <p>□下葉の裏に多く寄生するため、生育に影響のない範囲で下葉を除去した後、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。</p> <p>□薬剤によってはミツバチへの影響があるので、薬剤の選択には注意する。</p> <p>□特にナミハダニは薬剤抵抗性が発達しやすく、県内でも薬剤の効果が低下している事例があるため、防除薬剤については総合農業技術センター平成29年度成果情報「ナミハダニの薬剤に対する感受性」 https://www.pref.yamanashi.jp/sounou-gjt/h29seikajouhou.html を参考に防除をする。</p> |

【野菜全般】

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | 予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□） |
|--|------|-----|--|
| 灰色かび病 (半促成キュウリ・イチゴ等) | — | 平年並 | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように、過度な灌水は控え、低温に注意しながら換気を行い、施設内を適度な湿度に保つ。また多湿時は暖房機および循環扇を稼働させ、湿度の低下を図る</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉、花、果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□前年多発したほ場では発生に注意し、予防散布に努める。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> |
| うどんこ病 (半促成トマト・半促成キュウリ等) | — | 平年並 | <p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉、花、果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> |

【野菜全般】

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | 予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□） |
|--|------|-----|---|
| アザミヤ類 (半促成トマト・ 半促成キュウリ・ イチゴ等) | 平年並 | 平年並 | ○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高い見込みである。 □早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。 □侵入防止のため施設開口部に防虫ネットを設置する。 □施設内外の雑草は発生源となるので除草を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。 □薬剤によってはマルハナバチ、ミツバチへの影響があるので薬剤の選択には注意する。 |

II 各病害虫対策

【果樹 ブドウ越冬病害虫の防除対策】

石灰硫黄合剤はブドウハモグリダニやサビダニ類の越冬虫に極めて効果が高いので、住宅地の近接園などでは周辺環境に配慮しながら、使用可能な地域では希釈倍数20倍（OAT石灰硫黄合剤、余市組合石灰硫黄合剤を除く）にて散布する。なお、石灰硫黄合剤の散布ができない地域では、ブドウハモグリダニ対策として、クムラス300倍を散布する（展着剤加用）。ブドウハモグリダニの発生が見られる園では、展葉初期（平均2～3枚）にコテツフロアブル2,000倍を散布する。

- (1) 巨峰系4倍体品種（巨峰、ピオーネ、藤稔他）、デラウェア、甲州の薬剤散布
 - ・発芽前にベンレートT水和剤20またはベンレート水和剤を散布する。
 - ・ベンレートT水和剤20は単用散布とし、石灰硫黄合剤を2週間前までに散布する。
ベンレート水和剤は石灰硫黄合剤と混用してもよいが、その場合はベンレート水和剤を先に溶かしてから石灰硫黄合剤を加用する。
- (2) シャインマスカット、サンシャインレッド、甲斐路の薬剤散布
 - ・発芽前（3月下旬）にデランフロアブル200倍を散布する。黒とう病、つる割病の感染期は早いため、散布時期が遅れないように注意する。
 - ・デランフロアブルは単用散布とし、石灰硫黄合剤とは散布間隔を5日以上あける。クムラスはデランフロアブルと混用してもよい。

【果樹 立木類（モモ、スモモ、オウトウ）】

ハマキムシ類対策

- (1) 開花期から、花や発芽初期の葉を綴り合わせて食害する。中齢幼虫以降になると、防除効果が劣るので適期防除を心掛ける。
- (2) ハマキムシ類の多い場合は、落花期にフェニックスフロアブル4,000倍を用いる。

灰星病（花腐れ対策）

- (1) 落花期に降雨が続くと発生が多くなるので、天気予報等に注意し、防除を徹底する。
- (2) オウトウの雨除けハウスでは、開花期に降雨が続く場合、上部のビニールをしめるなどの対策も併用する。

【夏野菜作付前の対策】

夏秋ナス 青枯病、半身萎ちょう病等

- (1) 苗は抵抗性台木を用いる。また、ほ場は過湿を避けるため高畝にして排水対策を心がけるとともに、連作をさける。
- (2) 土壌中に残存している病原菌や害虫を死滅させるため、本畑の土壌消毒を行う。

【サツマイモ基腐病の対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、以下の点に注意する。

- (1) 未発生ほ場で生産されたことの確認などにより、健全な種苗を確保する。
- (2) 植え付け前の種苗消毒を行う。
- (3) 栽培期間中は、ほ場観察を通じて本病の早期発見に努める。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参照とする。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和4年度版）」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/158250.html

【稲】

種子伝染性病害対策

種子伝染性病害では、主にいもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病などがある。以下の点に注意し、は種前の防除を徹底する。

- (1) 発病ほ場の籾は、種子として使用しない。
- (2) 塩水選を行い、り病籾を選別し、取り除く。
- (3) 薬剤による種籾の消毒は同時防除を徹底する。

いもち病、もみ枯細菌病、ばか苗病の同時防除を行う場合は、次のいずれかの方法で行う。

- ① 乾燥籾を薬剤（スポルタックスターナSE200倍又はテクリードCフロアブル200倍）に24時間浸漬する。
- ② 乾燥籾を薬剤（上記薬剤の各20倍液）に10分間浸漬する。

なお防除効果を高めるため、薬液の温度は15℃以下にならないようにする。

苗立枯病対策

苗立枯病は、主にリゾープス菌やピシウム菌、フザリウム菌、トリコデルマ菌などの糸状菌によって引き起こされる。以下の点に注意し、育苗期の防除を徹底する。

- (1) 育苗ハウス、床土及び育苗箱の消毒を徹底する。
- (2) 緑化期以降は昼間25℃以上、夜間10℃以下にならないよう、保湿資材の開閉はこまめに行う。
- (3) リゾープス菌による立枯病を防ぐため、べた積みは避ける。高温や多湿、過灌水は発病を助長するため注意する。

Ⅲ その他

【水田において使用する農薬の止水期間の遵守について】

- (1) 農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項を確認し、止水期間を7日間とする。また、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備に努める。
- (2) 水稲初期剤の使用時期は、移植または播種の7日前までであり、農薬の河川等への流出を防止するため、移植6日前以降には使用しないこと。

【令和6年度 病虫害防除基準・農薬適正使用指針】 が刊行されます。

価 格：2,500円（税込、送料無料）

販売開始時期：4月上旬

お問 合 せ 先：山梨県植物防疫協会

〒400-0034 甲府市宝1-21-20（山梨県農業振興公社内）

TEL：055-232-2760

FAX：055-223-2117

【農薬は正しく使いましょう】

（農薬の適正使用について）

https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kenkyu/nouyaku_shiyou.html 参照

連 絡 先

山梨県病虫害防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病虫害防除所ホームページ

「トラップ調査結果」「病虫害写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>